様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2020～2021
課題番号：２０Ｋ２１９２３

研究課題名（和文）日本近世の武家社会における儒学的教養の形成と闇斎学

研究課題名（英文）Confucian culture and Ansai studies in the ruling class of the early modern period of Japan

研究代表者
綱川　歩美（Tsunakawa, Ayumi）

東京学芸大学・教育学部・研究員

研究者番号：６０８８２６２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日本の17世紀末から18世紀における武士階層の儒学受容に焦点を当てた。この時代は18世紀半ば以降の幕政・藩政改革なかで、政治と学問（儒学）の緊密な関係が形成される前段階であり、学問の社会的有用性が未だ信用に足らない時代である。本研究の成果は、儒者と武士が儒学（朱子学）を共通の政治的方法論として錬磨していく過程を明らかにした点にある。儒者と藩士・藩主を主な構成員とするこの時期の闇斎学派では、初歩的な道徳教化を個々の政治主体化への目処としていた。とりわけ低年齢、幼年の君主への教化という課題が意識された。このことは、藩校の設置をはじめとする藩士教育への移行を推し進めるのに寄与したはずである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、日本の近世における儒学（主に朱子学）が、藩地域（大名家を中心とする武家社会と関連する諸地域）への受容の過程を明らかにするものである。近世の儒学思想は個人の修養から家の規範、そして政治の次元までを包摂し、ある種の変容を伴いながら、教化や教育を通じて人々や社会の一部を形成していく。個人や組織のなかでの受容をめぐる具体的な経緯をより鮮明に描くことが重要である。そして、その解明によって近代へとも繋がる個々の規範や家意識を理解することができるはずである。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the acceptance of Confucianism in the samurai class from the end of the 17th century to the 18th century in Japan. The politicians of this era were not at the stage of valuing scholarship (Confucianism) in politics, and were not aware of the social usefulness of scholarship. The result of this study is to clarify the process by which Confucian and samurai acquired Confucianism (Cheng-Zhu) as a common political methodology. In the Ansai school (main members of the Confucian and Samrai), they needed basic moral indoctrination to gain political consciousness. In particular, they emphasized the indoctrination of young successors . This should have contributed to the establishment of schools in the clan and the transition to clan education.

研究分野：日本近世史

キーワード：闇斎学　武家社会　儒学　藩儒　藩主　教育　日本近世

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

筆者は、これまで闇斎学について、学問や思想受容者の思想形成やその実践について関心をもち研究に取り組んできた。具体的には、江戸幕府の幕臣や藩校の儒者といった武家社会の構成員を対象とし、その思想形成過程や活動について分析してきた。

本研究を開始する段階の当初、闇斎について朱子学的な世界観や心性論を摂取しつつ、より実践的な修養法や啓蒙に注力したとされる評価がなされていた（土田健次郎『江戸の朱子学』筑摩書房、2014 年、58 頁）。日本における儒学受容の大局から、近世社会と闇斎学の接合を意識した段階的位置づけを明らかにするものである。修養や啓蒙といった側面は、道学主義として思想的斬新さの点からは評価されにくかった闇斎学の特徴であり、その意義を改めて考えさせるものである。そして闇斎学が修養と啓蒙を説いた対象の多くが武家社会の構成員である。彼らの学修の実態を明らかにすることで、闇斎学の儒学的教養（道学主義的な）が武士個人の行動倫理とどのように関係したか、あるいは武家社会における学問について新たな知見を得られると考えたわけである。

そこで、近世の身分制社会を構成する一つの階層である武士たちの持ち得た心性や行動倫理と儒学的な教養との関係を問うことを目標として定めた。それは、武士階層の思想形成の過程を通じて、例えば「武士的なもの」あるいは「日本的なもの」として社会に形成されていく精神とどのように繋がるかを問題にすることでもあった。闇斎・闇斎学と武士階層との関係性を思想内容のみならず、その思想の受け皿となる社会の特質を明らかにすることが重要であるという問題意識を強く有するものであった。

２．研究の目的

本研究は、近世武士階層の政治的活動につながる、主体形成の過程に闇斎学の基礎教養はどのように関与したのかを明らかにすることを目的としている。近世の儒学が為政者である武士階層の間で言及されるのは、政策提言や政治方針との関係が中心である。そうした提言や方針は俄に沸いて出るわけではなく、武士階層の儒学的教養の素地があってこそ発せられるものであろう。闇斎学は、狭隘な道学主義と言われながらも、まさにこの基礎的な教養に関わる部分を藩校や私塾において教えを実践し続けた学派集団と考えられる。そこで、闇斎学の学修スタイルと武士階層の主体形成の影響関係はいかなるものであったかを、闇斎学の教えと武士たちの学びの双方を分析することで明らかにするものである。

３．研究の方法

本研究は、(1) 闇斎学の儒者たちの学問論の検討と、(2) 藩主・藩士らを中心とする武士階層の学修実態の解明という視点から進める。(1) について、儒学の基礎的学問である「六芸」を闇斎学ではどのように捉え、学び・教え方において位置づけていたかを明らかにする。あわせて闇斎学の儒者たちが為政者である武士階層に要請した儒学的な主体についても明らかにしたい。(2) については、藩士が記録した講義録や随想をもとに、論じられた儒学論と彼らの生活実感や倫理行動、さらには政治的主体としてのあり方との関連を探る。また藩士個人の記録とともに、学修の場でもある藩校の慣習や制度の面も踏まえ、武士階層に儒学的教養が身に付けられていく過程を分析する。

以上の方法をもって、具体的には日向国・高鍋藩と越後国・新発田藩の儒者と藩士を主な対象として設定する。両藩ともに 18 世紀の前半から闇斎学を受容し、その藩校における教育も基本的に闇斎学を踏襲している。

４．研究成果

(1) 研究材料としての史料調査・発掘について

本研究をすすめるにあたり、研究対象についての史料調査が必須となった。高鍋藩や新発田藩は、闇斎学を受容した藩としてすでに知られていたが（笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』吉川弘文館、1969 年）、実際に残されている史料類やその内容をもとにした詳細は明らかにされてこなかった。そこで、まずは現存する闇斎学派儒者の著述と、藩政における儒学受容の様相を記録した史料の調査を行った。

まず、新潟県新発田市の新発田市立歴史図書館に収蔵されている、藩政史料・郷土資料から闇斎学派儒者・稲葉迂斎と黙斎の父子二代にわたる史料を中心に調査を行った。特に迂斎については、闇斎学系統のなかでも名前は知られていたが、その思想活動の実態についてはこれまでほとんど触れられてこなかった人物である。今回の調査において、複数の『文集』（主に息子の黙斎の編纂による）を新発田藩にも確認できた。その中には、迂斎が多くの大名個人や藩政の担い手に対して行った「上書」類が多く収載されていた。また、同図書館には新発田藩の藩庁記録が長期間にわたって残されており、儒者の待遇や藩内における教化政策の様子を窺い知ることができた。

一方、高鍋藩の闇斎学関係史料を有する、宮崎県高鍋町立図書館については、コロナ感染症の流行によって調査が困難になった。調査日程を何度か調整するも、県外からの移入の制限や、調

査延期の要請を受け現地に出向いて調査することが叶わなかった。重要と思われる史料の遠隔地複写を申請しようとするも、あいにく当該史料がデジタル化作業の対象となったためそれも実現しなかった。そこで、高鍋藩に関係した闇斎学派関係史料を、同館以外に検索し、九州大学付属図書館、名古屋市立蓬左文庫等の調査に切り替えた。具体的には、高鍋藩儒・千手廉斎が師事した宇井黙斎、またその師匠筋にあたる三宅尚斎の史料である。九州大学付属図書館が所蔵する黙斎の『読思録』はこれまであまり触れられてこなかったが、千手廉歳の『自求録』と内容と照合してみると、いくつもの箇所で引用関係が確認できた。つまりは廉斎の思考過程において、黙斎の著述が参考にされ、思考の連続を跡づけることが可能である。さらに、三宅尚斎に関する史料調査においては、はからずも高鍋藩のみならず新発田藩や忍藩とも関連する史料の鉱脈を得たことは、今後の研究もふくめ大きな成果である。

以下には、①17 世紀末から 18 世紀中頃までの事例として三宅尚斎（忍藩）と稲葉迂斎（新発田藩）の場合を、②18 世紀後半の事例として千手廉斎（高鍋藩）を取り上げ、二方面の研究課題に即した成果を述べたい。

（2）闇斎学派の儒者たちの学問観あるいは学問論

①稲葉迂斎の場合は、『幼君輔佐之心得』を分析することで、その学問論を考察した。本書は、元文元（1736）年に叙述されたもので、主に幼藩主（または嗣子）に側近く仕える守り役に対しての心得 11 条からなるものである。標題から分かるように、内容は幼君の生活習慣から学問の重要性、婚姻相手や側近配置の要点などで、幼君の徳性の涵養と人格の感性が目的とされている。当然ながら幼年期からの教育が必須であることを前提としている。これは、迂斎が唐津藩土井家に侍講として仕えた際の経験を元にしていると思われる。こうした幼君に特化される学問論・教育論は、藩の中心となる君主をして藩政の円滑な運営、ひいては藩の存亡に関わる要素として認識されていた。これは徳治主義の実現を信じ、その効果を最大限に発揮するために幼君教育に照準があてられたと言える。

②本研究開始以前から部分的に史料解読を勧めていた高鍋藩儒・千手廉斎の『自求録』（12 巻 7 冊）の全体を分析し、廉斎の学問論の抽出をおこなった。生涯一貫して闇斎学を奉じた廉斎が、学問の目的として始終掲げていたのは、個々人の人格形成である。朱子学の「理」を絶対視し、その「理」の実現を旨とする自己修養が学問によって達成できるとするものである。廉斎は「六芸」に含まれる種々の学びを肯定しつつも、経書を中心とする道徳規範の獲得を主軸として、それ以外の学芸に拘泥することを戒めていた。

また、廉斎の学問論は年齢の若い藩士層（嫡子を含む）を対象としていた気配がある。藩の学問所師範としての立場を考えれば当然とも言えるが、その教授法はかなり具体的で、若年層にとりわけ配慮した内容になっている。それは中国由来の経書を教材として扱うにあたって、言葉の意味、内容の咀嚼を重視するための配慮と考えられる。そして廉斎の学問論は、徂徠学への批判・否定を強く意識していることも特徴である。徂徠学が一世を風靡するなかで問題視された「気質変化」による人格形成の否定は、廉斎にとって到底受け入れられるものではなかった。廉斎は、出自や身分を含めた個人が持ち得る才能や資質を伸張することで、社会的に有用たらんとする徂徠学的な学問観が、かえって諸生の学修意欲を欠く事に繋がるという考えがあったからである。総じて、廉斎の学問論は高鍋藩家中を対象とし、人格形成を主眼においた人材育成に直に繋がることを意図したものであった。

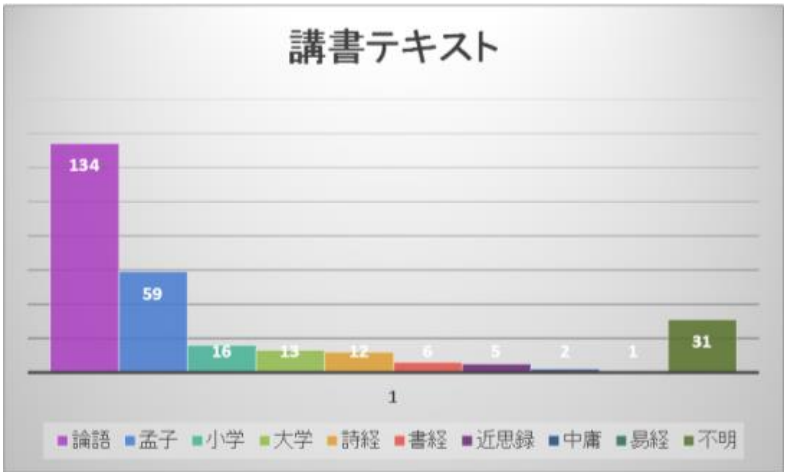
（3）藩主・藩士らを中心とする武士階層の学修実態

①三宅尚斎と稲葉迂斎の藩や藩主との関係性を詳細にみていくことで、武家社会における儒学受容の局面で、儒者と武士がそれぞれ直面する不寛容を具体的に明らかにできた。尚斎が忍藩・阿部家に仕える中で理想としたのは、上下懸隔のない風通しのよい、道義にかなった政治が行われることである。そしてその実現は朱子学を体得した「人君」と「賢才善人」の家臣によって実現できるとの信念があった。しかし実際は世間に阿る「姦人」の専横によって政治が行われていると尚斎は認識した。儒者としての理想と現実の乖離を尚斎に認識させ、達成されない不満は致仕願望へと繋がった。こうした尚斎の藩に対する帰属意識の希薄さは、藩主をはじめとする藩政の担い手にとっては「我が侭」と映り、批判・処罰の対象となっていった。尚斎は阿部家との一件の後も、いくつかの藩に仕えるが、その立場は「賓師」であり、家臣団の列に加わることはなかった。ここには、儒学の思想内容に対する親和と反発というよりも、藩という組織での帰属と役割が問題になっていたことが分かる。

一方の迂斎の場合は、唐津藩に儒者として出仕し藩主や嗣子の侍講をつとめた。その他にも他藩の藩主や幕臣の子弟へ向けた「上書」を頻繁に提出している。こうした行為は他の儒者にも見られるものであるが、その内容は徳の涵養のための道徳的修養の必要性を説くことに特化している。「上書」の背景には藩側に後継者教育、“善良なる”藩主を支柱にした「御家」の継続という目的があったと考えられる。そしてそれが儒者である迂斎が儒学の必要性を武士に認識させるための接点であった。その意味で『幼君輔佐之心得』は儒者と藩の結節点に成立し、迂斎なきあとにも再び、新発田藩主直養をして藩政に有用な書物として認識され、藩版として流通したの

である。次世代以降の藩主の再生産に有用とされた所以であろう。
　尚斎と迂斎の儒者としての藩との関わり方は、儒学が武家社会に場所を得ようとする際の摩擦とその打開策の一端を示している。

②高鍋藩では、享保期ごろから藩の学問所が置かれるなど、藩学への関心は早い段階から確認できる。しかし実際に藩学の内実が整っていくのは、やはり安永 7（1778）年に明倫堂が設置されてからである。廉斎が有した学問論の根幹にあった学び手の人格形成は、そのまま藩校での教化目標にされていた。文政 12 年から嘉永 4 年（内天保 5～10 年を欠く）のあいだに、明倫堂で行われた講書の内容は『論語』や『孟子』をテキストに、孝や忠の道徳心を説いたり、自己省察の方法を問いかけたりするような内容が目立つからである（『明倫堂記録』）。また、行習斎と著察斎という年齢と学問内容を別にした、学びの段階によって分類される藩校のあり方は、年少者への教授方法を意識した廉斎の考えが反映されているとみることが出来る。そして、教化の先には家中藩士の皆学と廉斎が「中行之士」という道理を体現した藩政の担い手育成が望まれた。総じて高鍋藩の場合は、廉斎ら藩校第一世代の儒者たちの目論みが継承されていたと考えられる。



５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）
①綱川歩美　近世後期藩学と闇斎学－高鍋藩・千手廉斎の『自求録』を中心に－、史海、第 68 号、2022 年、14－34。
②綱川歩美　書評　松川雅信著『儒教儀礼と近世日本社会』、史学雑誌、第 130 編巻 7 号、2021 年、90－96。

〔学会報告〕（計 2 件）
①綱川歩美　闇斎学と武家社会―三宅尚斎と稲葉迂斎を事例に－、書物・出版と社会変容研究会、2022 年。
②綱川歩美　近世後期藩学と闇斎学―千手廉斎の思想と行動から－、東京学芸大学史学会例会報告、2021 年。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 綱川歩美	４．巻 第68号
２．論文標題 近世後期藩学と闇斎学ー高鍋藩・千手廉斎の『自求録』を中心に	５．発行年 2022年
３．雑誌名 史海	６．最初と最後の頁 14－34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 綱川歩美	４．巻 第130号巻7号
２．論文標題 書評　松川雅信著『儒教儀礼と近世日本社会』	５．発行年 2021年
３．雑誌名 史学雑誌	６．最初と最後の頁 90－96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 綱川歩美
２．発表標題 近世後期藩学と闇斎学ー千手廉斎の思想と行動
３．学会等名 東京学芸大学史学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 綱川歩美
２．発表標題 闇斎学飛ぶ卦社会ー三宅尚斎と稲葉迂斎を事例に
３．学会等名 書物出版と社会変容研究会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関